

日 時 平成24年2月11日(土)  
会 場 小牧市立小牧中学校  
講 師 豊田市立竹村小学校 和田裕枝先生  
テーマ 「4月の2週間が勝負だ!! 教えます。授業づくりの基礎・基本」

注 ※は記録者による観察です。  
言葉を補っているところがあります。  
子どもの発言であるABC～は、固定された人ではありません。

今日は10時から12時まで模擬授業形式で行う。

子ども役の人以外の方は教師としての視点で、子ども役の方は子どもになりきって見てほしい。

子ども役の一番前の方は手がかかる子、後ろの子は優秀な子、真ん中は普通の子と分ける。

竹村小学校の現職教育では教師が子ども役をして模擬授業をしている。職員である志賀先生が、そのときにキーワードを書いてくれる。

若手の方は自分がメモをするときに自分と同じなら視点が同じということ。志賀先生も重要な役なので、そこも見てほしい。

教師力アップセミナーは平成16年以来だ。その時は、授業をやっていると玉置先生からストップがかかった。「何であっちを見ましたか?」しかし私は考えてやっていない。(笑) 繰り返し聞かれて、どうしてか考える方が苦しかった。(笑)

改めて考えてみると、何をしているかと考えた時、私は、子どもの発言を聞くときに、「周辺視」、広い範囲を見ていることがわかった。その反対が「中心視」。

NHKの番組で、中村俊介選手が試合中、視線がどこを見ているかを取り上げていた。他の選手はボールを見ていたが、俊介はそのボールの動く先を見ている。そこが、違う。

私もそう。発言したときに全体を見ている。この人の発言にどういう反応をしたのかを見ている。そうして理解度を考える。うなずいたということは、分かっているので指名できる。はてなという顔をしたので、この子はだめだとわかる。これが周辺視で、子どもの理解度を把握している。

子どもをよく見るために動く。よく聞くために動く。後ろまで必ず行く。授業でもそうしている。

今日は、いろいろな授業をやるときに、4月の2週間が勝負だという話をする。この頃には、最初の授業参観があるから、私はそれまでが勝負だと思っている。それまでに学級をつくる。学習規律をつくる。

4月当初、頑張ろうと思っている子ども達の姿を保護者に見せたい。2週間までに学びの種をまいて、一生懸命考えている授業を、保護者に見せることにしている。みなさんにもそういう目で見ていただけるとよい。

褒める種をまく、学びの種をまく、どんな種をまいているか探してほしい。

「うなずいていて偉いね」「メモしていかんよ」

私は、視力がいい、耳もダンボ。子ども役の人は子どもになりきって、見ている人は、どうやって学びの種をまいているかたくさん見つけてほしい。

ときどき、志賀先生の板書も見してほしい。朝の会から休憩なしでノンストップで行く。

### 【 朝の会 】

T「気をつけの仕方が上手！」

係「今から朝の会を始めます」

T「はいとってくださいよ」

全「はい」

T「健康観察をしてください。いい姿勢でいますね」

係「体の具合が悪い人いませんか？Aさん」

A「朝からお腹がいたいです」

T「途中で痛くなったら言うんだよ」

係「これで終わります」

T「はやっ！」（笑）

朝の会をどうしているか？私はいっしょに朝の会をやる。教卓で連絡帳を見たりしない。連絡帳はその前に済ませておく。子どもと一緒に立ってやる。その時に姿勢を見ながら褒めていく。

その子の姿勢が悪いと歩きながら姿勢をチェック、健康観察のチェック、子どもの健康観察は私自身がする。それを見て、「具合が悪かったことをよく伝えたね」と安心させてやる。

歌も、口を開いていない子には口を開ける。

朝の会で教室を1周する。立っていることはしない。

朝の会はこれで終わり。

### 【 音楽の授業 】

笛を持っているまねをして欲しい。

T「えらいね」「うまいな」

誰かを褒めればよい。真似をするから。一番も偉いけど、良いところを真似した人も偉いとほめる。

音楽の時間、笛をやるときに、ピーピーうるさい。

私は「静かに」とは言わない。こうする。

T「この列から行く。みんな待ってて。そーっと吹いたらそっと吹く」

※ 一人ひとり吹く。

T「うまいね」「指の持ち方がうまい」「息の破棄か違うまい」「腕を張っていないのがいい」「ちょっと息を出してごらん」「上手に聞いているね」「真似をしている人がいるよ」「ちょっと前かがみになっているよ」・・・

いつもは楽器があるので、「音色がいいね」などとほめる。

T「お腹いいですか？」健康観察でお腹が痛いと言った子にはさりげなく声をかける。

T「元気がいいね。もう少ししたら体育だからね」（笑）

こうやって回る。

毎回やると、絶対に音を出さない。自分はどういってもらえるかコメントを考えているから。順番にやっている時にも、友達へのコメントを聞いて自分もチェックする。学習することを与えているから遊ばない。

この一音だけやるから、40人にいても3分以内で回ってくる。だから待ってられる。

T「今度は、笛の用意をしてください」

「先生が言った人だけ ソッソッソー 男の子」「ソッソッソー」「女の子」「ソッソッソー」「今朝、朝ご飯を食べてきた人だけ」「ソッソッソー」「おいしかった人だけ」「ソッソッソー」「お母さんが美人の人」「ソッソッソー」「親子でもめないように。保護者会なら笛吹くんだよ。お父さんがハンサム」「ソッソッソー」・・・・・・・・

いろんなパターンで時々休憩して、友達の音を聞くように、休んだり、吹いたり、子どもが楽しみながらする。一斉に子ども達も見るから、だれだれだけ吹いていないことはない。いろんなパターンをやって、にこやかになる。笑顔になるので吹き方も元気になる。

T「一万円もらったつもりで」「ソッソッソー」

「一万円落としたつもりで」「ソッソッソー」

うれしいときと悲しいときは吹き方が違う。曲の時もそうやって吹き分けようという。こうして何回も吹く。次は国語、

### 【 国語の授業 】

子どもは鍛えないといけない。

T「国語の教科書を開いてください。持ち方良かったよ。『ごんぎつね』を一斉に読むよ。指読みをする人は指を置いて。これはから、はい！」

※ 音読が始まる。教師は歩きながら、背中を触っていく。

T「はい、そこまで。トントンとやってもらった人は上手に読んだ人だよ。またやってもらうように読むんだよ」

※ 再び始まる。口を観察しながら肩を触っている。

T「はい、ストップ！」

という風に、一斉読みのときは、いつも周りながら合図を決めている。なかなか出来ない子も、私が通る寸前に声が大きくなる。今日は間が歩けないが、声を出しているかを聞

いている。読みとりのときは黙って読むときもある。

一年生は顕著に表れる。通り過ぎると小さくなるが、「先生は、ぼくの口を見ているんだ」と思う。教科書でなく、子どもを見ている。子どもの口を見ている。

あの漢字のところは遅れたなど、耳で聞いて、誰がどこで読めずにとまどったかを観察している。どの子が出来ていないかを把握しながら見ている。

そう言う風にやっている。国語は終わり。

### 【 算数の授業 】

算数が一番得意なので時間を長くした。

今日の時間の前時に、直角三角形の面積を求めている。その次の授業という設定である。5年生の教科書を配った。

※ 以下、A～D：下位児童、E～G：中位児童、H～K：上位児童 というイメージである。

T「昨日、直角三角形の面積を求める勉強をした。何をした？」

H「はい。昨日の学習で、直角三角形の面積は、長方形の半分だとわかりました。どうですか」

全「いいです」

A「すげえ」

T「何がすごい？」

A「昨日やったこと覚えていない。覚えているのがすごい」

今は、優秀な子を当てた。昨日の学習が出来たかどうかは、つい弱い子を当てたくならないか？

私は弱い子を一番に当てることは抵抗がある。初めに優秀な子を当て、思い出した頃に前の方（弱い子）を当てる。

「いいです」と言った。みなさんの学級でもやっているのでしょうか。わたしは、「どうですか？」「いいです」はしない。

なぜか？「いいです」の意味が違うから。「いいです」とひっくるめられると困る。人と違う意見を言って欲しいからだ。

同じです？ありえない。同じでいいから言ってごらん。同じはずがない。

戻ります。

T「習ったことを言ってみてください」

I「昨日の学習で、直角三角形の面積は、長方形の面積の半分だとわかりました」

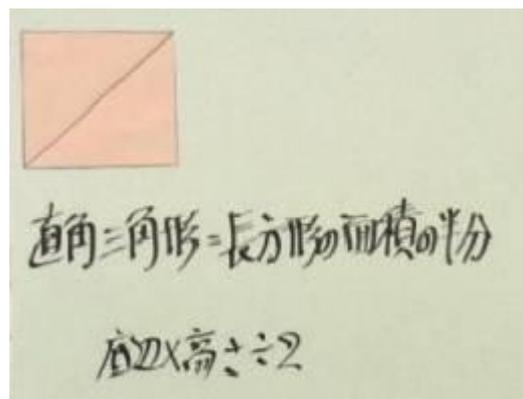
J「面積は、底辺×高さ÷2だと思います」

板書

T「Aくん、底辺と高さはどれ？」

A「わからない」

T「黒板で指してみて。行ってきて」



- A 「ここだと思えます」  
 J 「そこは底辺だから、A君が言った底辺は合ってます」  
 T 「底辺は合っていた」  
 A 「よかった」  
 T 「指さすよ。おいで」  
 A 「高さはここです」  
 T 「もう一つは違っていた。高さは？」  
 A 「ここだ」  
 J 「微妙・・・」 (笑)  
 T 「微妙？どういうこと？」  
 T 「あなたは どう思う？」  
 E 「そこも高さだけど、場所が違うと思う」  
 F 「僕も、そこが高さだと思いました」



中位の子には追究する。  
 前の子は、答えればいい。  
 後ろの方は、理論的に説明してもらおう。  
 分けて指名し、分けて追究している。そうすると、それぞれが活動できる。  
 低い子はしょっちゅう前に出すから遊ぶヒマがない

- T 「高さは？」  
 B 「6センチ」  
 T 「どう？」  
 J 丸をつくる  
 T 「○くれた、よかったね、6センチ」

※ 低位の子に聞き、他の子に確認をしている。低位の子がわからないときは、他の子に助言や説明を求めている。  
 最後には、低位の子に「よかった」と言える場をつくっている。

- T 「高さは、C君」  
 C 「・・・」  
 T 「聞こえた？一番後ろまで」  
 C 「4センチ」

※ 発言者以外の子の顔を見て、聞こえないという表情が見えたので確認している。

- T 「D君、公式でやるよ」  
 D 「 $6 \times 4 \div 2$ です」  
 T 「E君」

E 「12 cm<sup>2</sup>」

T 「そうですね。A君読んで」

A 「12センチメートル2乗」 (笑)

T 「代わりに読んでくれる人、手を挙げた回数前覚えているよ。I君」

I 「12平方センチメートルです」

T 「合ってる？よかった」

前の子は、後ろの子の助言や考え方を聞いてやっている。説明を聞いて前の子が悪かったら、それは説明する人が悪いという考え方でやっている。

復習をやった。普段は5分ぐらいで終わる。

T 「昨日は、直角三角形の面積を求めました。今日は、・・・・」

新しいことを見せるときは、全員がこっちを見てから見せる。

そして、見たら反応するようにしつけてある。

T 「今日は、・・ (図に斜線)・・この三角形の面積を求めます」

T 「反応がないね、むずかしい？」

C うなづく

T 「そう・・・・。何で難しいと思った？」

C 「昨日は直角があったけど、きょうはない」

T 「昨日の授業と比べて言えたのは天才！えらい！

昨日は直角があったのに、今日は直角がない。」

板書「直角がない」

T 「今日は直角がない三角形をやっているよ。難しい、困るよね」

H・I など「直角あります」「作れます」

T 「作れる？おー？どこにつくれる？ 指が動いている」

※ つぶやきを拾って、子どもの活動意欲を引き出している。

T 「ありそう？」

F 「線を引いたら作れそう」

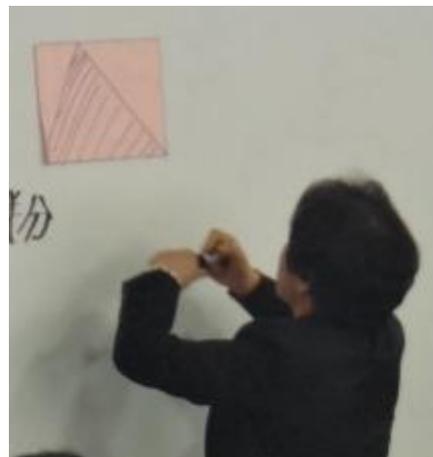
K 「線を引かなくても、見える直角があった」

T 「それは、後でやるから待っていて」

Kのように、自分を取り上げたくないけど、まちがいではない発言がある。

こういうことは、公式で言うとか、塾で習ってきたこととか、あるものだ。

そのときは、「ちょっと待って」という。「ごめん、今日は使わないけど3時間目に使



うからね」とか説明する。

その代わり、覚えている。3時間目にやるときには、「お待たせしました。K君の出番です」という。

これまで覚えていて、実際に使えるかどうかが教師の力量アップである。

使わないと、子どもとの信頼関係が壊れるので必ず使う。「あとで」は危険、「いつやる」が大切。

T「Fさんは線を引いたら作れそうとっています。どこに引くのですか？」

G「Fさんはここだと思っています。（Fを見て）どうですか」

今、GさんはFさんを見た。それでいい。

よく（他の子の意見に対して発言する）子どもが先生を見ている。それはだめ。

Fさんが言ったことなので、Fさんに責任をもってもらう。だからFさんに言う。視線も担任ではなくFさんを見た。

これで、子ども同士の発言がつながる。

また、自分の発言に責任をもつようになる。

T「もう一人、Fさんの言った線を引いてもらうよ」

D（斜めに引く）

T「これでいい？」

F「ちょっと斜めだとだめ」

T「さっきはだめ？」

G「まっすぐに下ろさないとだめ」

T「いいこと言ったね。まっすぐに下ろすよ。よく見ていたね。Dさん、まっすぐに下りるように線を引いてみてください」

※ 子どもの評価をすぐに他の子にさせている。それにより、他の子の動作をよく見るようになる。「よく見ていたね」はその評価である。

T「どうして（まっすぐ）引くの？」

I「まっすぐに引くと、直角三角形が出来るから」

J「二つの直角三角形ができる」

A「わかりません」（笑）

T「ほかの人がやって」

H「前に出ていいですか？」

T「見とらんといかんよ」

H「頂点から下ろすと、こっちの三角形とこっちの三角形が直角三角形になると思ったので引いてみた」

T「思ったので？そこが大事」



板書 赤で「直角三角形をつくれる」

そこまで教師が間に入ってあげてほしい。直角三角形をつくりたかったので線を引く。子どもの意見をつないでほしい。

※ 補助線の最初の発想はここにある。なければ書き足せば良いという発想をここで身につけさせたい。

T 「直角三角形、いくつできたでしょう？」

B 「（前に出てきて、二つの三角形の中心をさわりながら）こことここ」

E 「（前に出てきて同じように）こことここ」

T 「はいやってきて」

J 「（二つの三角形の辺をなぞりながら）こことここ」

T 「A君、J君の真似をして」

A 「（辺をなぞりながら）こことここ」

T （板書に、2つの を書き加える）

J君と前の二人は違った。ちゃんと三角形の辺をなぞっていた。他は、真ん中を触っただけ。辺をなぞることで、高さがわかる、辺がわかる、直角が分かる。

子どもは正直だから、「辺を指して」といってもこうやる（中央を触る）。ここに指を指した子は、数量感覚が乏しい。自分のレベルで指を指す。正直、これを見逃すのは先生。一緒に見えているとしたら教師の力量不足。

辺といったらABといわせるような形だけやると子どもはわからなくなる。

ここでは囲む子がいると思ったので何人かを指名した。

※ 三角形を指すのに、真ん中を触るのと、辺をなぞることの意味が大きく違うことがわかった。

※ Aは、前の段階で二つの直角三角形がわからないと言った子である。下位の子には、すぐに前へ出して真似をさせて確認させている。

板書をするときは、まだ出来ていないときは、子どもが言ったままを書く。意見に従って加えていく。板書は、子どもの意見をつないで順番に完成させる。つないでつないで完成させる。板書に変化が見えるので、板書を見るようになる。見ないと、どこが変わったかわからないので、見るようになる。

直角三角形は、こうして出来ることで進む。

T 「直角三角形が出来ましたよ。筆箱出してください。直角のない三角形を求めますよ」  
（プリントを配布）

T 「えらいね。ありがとうございますと言った子を初めて見た。真似する子はもってえらいよ」（笑 みな「ありがとうございます」と言い始める）

T 「真似する子はかしこい子だよ」

T「(最後の) K君は名前を書けましたか」  
「最後の子が名前を書けたら先に進みます」

これでKがプリントが届くやいなやすぐに名前を書くようになる。そして他の子もすぐに書く。時間短縮になる。プリントを配るのに時間をかけたりしない。

5月になって、「もらったら名前を書くのですか？」という質問が出るのはありえない。

T「自分の考えで、直角三角形でない三角形の面積を求めてみてください」

○をつけながら

「線が描けているからいいよ」「番号が書いてあるからいい」「この線が描けたからいい」「ここはこことここが合っているのがすばらしい」「色分けしている、うまい」

と声をかけながらまわっている。

なかには、「これをどうしてこのマークで書いたか教えて」と後で聞くことを伝えているのもあった。

「この線がいいですよ」「言葉で分けたのがすばらしい」「ほかにあったらやってみよう」「これがいい、なかなかこれは書けない」「すごいね、後で教えてよ」「ちゃんと説明が書いてあるがえらい」



褒めると隣の子がのぞき込む。必ず周りが反応する。机間指導では、その中で出来そうなことを声かけている。同時に、周りの子も支援している。

「これところの違いが分かるように考えましょう」「短くなるように考えて」「○もらっていない人?」「これがどうしてこうなったか言えるかな?」「言える?それを書いて」「みんな○をもらいましたか?」

やらせたときには、必ず○をつける。

ベテランは1時間に2回やることもあるが、はじめは1時間に1回でいい。ここぞ全員が出来るようにしたいときにやる。1時間で4回もやるとだらける。

T「じゃあ、どういうふう考えたか言ってもらおう。二つの三角形を求められた人」

T「自信がない?」

C「間違ってたらずかしい」

T「そう、どこが自信がない?」

自信がない子には聞いてあげればいい。

H「二つの三角形に分けて式を考えました。多い方が $4 \times 4 \div 2$ 、小さい方が $4 \times 2 \div 2$ 」

子どもが言ったことしか書かない。付加はしない。 = も書かない。そうすると次に言いたくなる子がいる

T「 $4 \times 4 \div 2$ がどこか分かる人」

E「二つに分けた三角形の右側」

T「E君、もう一回」

E「二つに分けた**右側**の・・・」

T「わかった？ A君、やってきて」

※ Aは前に「わからない」と言った子である。常に前へ出してやらせている。いつ当たるか分からない緊張感を持たせている。

Eは「右側の」を強く読んだ。強調して言いたいことは強めに言うものだ。しかしノートを見ると棒読みになる。強く読んだところを聞いてやる。

それで、Aにも記憶に残る。

T「合っています。 $4 \times 4 \div 2$ はいくつですか」

B「8です」

T「小さい方はいくつですか。Cさん」

C「4です」

T「いいですよ。自信がないと言ったところが良かったよ」

Cは先ほど「自信がない」と言った子である。こうやってフォローする。

自信がないときには、寄り添って、良かったよと言うと安心する。これが子どもを見るということ。

T「この三角形（合わせたもの）は？」

ここは一番前の子（下位児童）しか見ていない。ここが勝負。これでできなかつたら、前にもどらなければいけない。

D「12」

T「12何？」

A「12平方センチメートル」

それでOK。○で終わるように、

T「さっきできなかつたもんね。2乗と言ってたもんね」

※ 間違えたことを覚えていて、ここで指名し正解させ、自信をつけさせている。  
出番 → 評価 → 喜び → 次の出番 というサイクルを作っている。

T 「Dさん、12はどうやった？」

D 「4と8を足しました」

T 4+8と板書

言ったとおりに書く。ここで「8+4」という子がいたらその子とやり合えばいい。ここで、12平方センチメートルを押さえる。一番前の子（下位児童）はしょっちゅう当たる。

お母さんも保護者会で見ているとき、授業に参加してやっている姿を見せれば安心する。保護者には、先生の言うことを聞いていれば出来るようになって帰ってもらいたい。

これを2週間で出来るようにしたい。

完璧に一人で答えなくてもよい。助けを借りてできるようになればよい。

T 「K君が、図に○と×を描いていました。説明して」

K 「こうなっているところからまっすぐに線を引きます」

T 「手を使って説明しています。手を見ないと分からないよ。」

K 「右側と左側の二つの長方形に分けられます」

子どもは、図形するときには、手を使ってしゃべる。手が言語活動を支援しているのである。そのことを見ないと困る。周りの子も手を見たらよく分かるから、友達の方を見るようになる。見る価値があるようにしてやる。見る価値があったと思うようにしてやる。

よく「話す人を見ましよう」というが、見る必要性を持たせれば自然と見るようになる。

K 「真ん中に線を引いたら二つの長方形に分けられます。今、真二つに線が入っていて、まず左側から見ると、こっちの三角形とこっちの三角形は合同です。」

他 「え～（わからないという意味）」

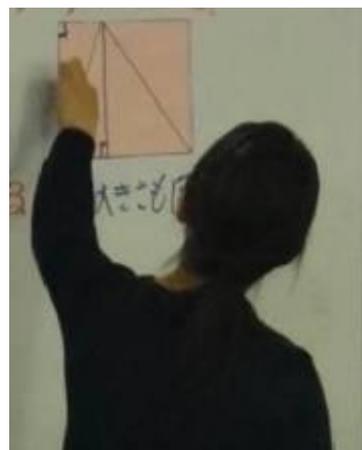
この子達（上位児童）は、自分の考えを表現するのに、レベルが高い。

後ろの子（上位児童）は能力が高い子なので、言語活動を使って説明させたい。だから前に来させない。記号もなくて、説明することはものすごくむずかしい。頭を鍛えている。なんとかわかりやすく言わなければならない。

A君が出来るかどうか、K君の説明力に懸かっている。

K 「（自分の席で）二つの直角三角形は、こっちとこっちにあるので、形も大きさも同じと思うから、同じ記号をつけました」

T 「Bさん、ここ？」



B「ここです」

T「これを合同と言ったのです。こっち側にも合同な三角形が見える人？D君」

D「今度はこれとこれ」

T「A君、わかった？」

自分に回ってくるから、話を聞かざるをえない。

A「ここだと思います」

T「○と×で答え出る？」

H～K「出ます」

T「後ろの人は出るって。どうぞ」

J「図の全体の長方形の中に、○が2こ×が2こあって、求めたい三角形は○が一つ、×が一つ。長方形の半分が求めたい面積だとわかりました」

T「長方形はいくつになるか分かりますか？」

D「24」

T「どうやって出した？」

D「縦×横で 4×6」

A「24」

板書

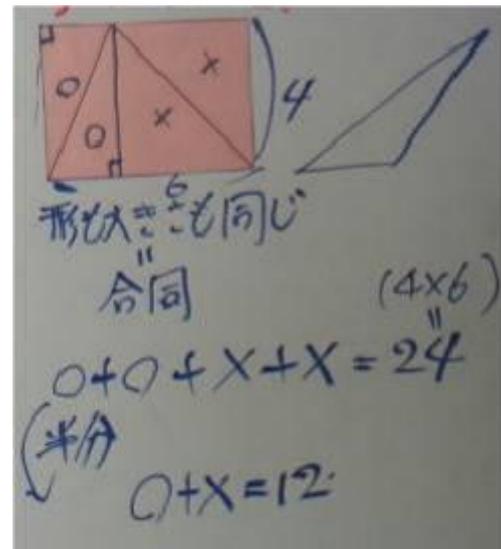
$$\bigcirc + \bigcirc + \times + \times = 24$$

$$\bigcirc + \times =$$

T「ここは？自分の言葉で言えるようにしましょうね」

B「半分だから12になります」

T「じゃ、今日勉強して、分かったことをノートに書きます」



ここで、わたしは子どもの鉛筆が動くかどうかを見ている。子どものレベルが違っても、鉛筆が動くかどうかを見ている。

私は授業時間中に個別指導をする。残してやるのではない。

2年生の5月に、これぐらいまで書けるようになる。毎日3分書かせる。

この子は優秀なので、概念で書ける。そうでない子でも、どうやってやるかを書くことができる。

よく「今日は、誰の意見でわかりました」と書かせるが、それは算数か？国語か？

算数では、算数の授業だと分かる言葉で書く。すなわち、数字を入れて書かせる。算数の時間の言語活動は数字を入れること。

学力のある子には、今日は直角三角形だけでも、・・・鈍角になったらどうする？と発展させる。



書くのが一番遅いのは出来る子である。書くことがいっぱいあるから。下位の子は書くのが遅く、上位は学びがたくさんあり時間を十分使うから、残りの時間の時間差で困ることはない。

なかには線分図を使って説明する子もあり、時間があっても足りない。

T (机間指導しながら) 「うまい」「何とかをすれば・・・この書き方がいいね」「すばらしい、読んでみて」

E 「直角でない三角形は、頂点からまっすぐに線を引いて、二つの三角形を作り、その後それぞれの面積を足します。でも、長方形の面積を2で割るとできるかもしれない」

T 「いいね、正直でいいよ。かな？がいいね。みんなで確かめようね」

子どもは自信がないと語尾が上がる。それを教師は見逃さない。

T 「Hさん、どうぞ」

H 「今日勉強して分かったことは、いろんな解き方で三角形の面積が出せることが分かりました。どんな方法でやっても1/2になったので、直角三角形があってもなくても、結局長方形の半分の面積であることがわかりました」

T 「結局 なんといった？」

D 「長方形の半分の面積」

T 「すばらしい。聞き取ったあなたもすばらしい。よくできましたね」

出来ない子には困ることがないように。キーワードを確認する。

板書 「長方形の面積の半分」

子どもの言葉でつないだまとめである。

これで子ども役を解任する。教師に戻ってください。資料を見てほしい。

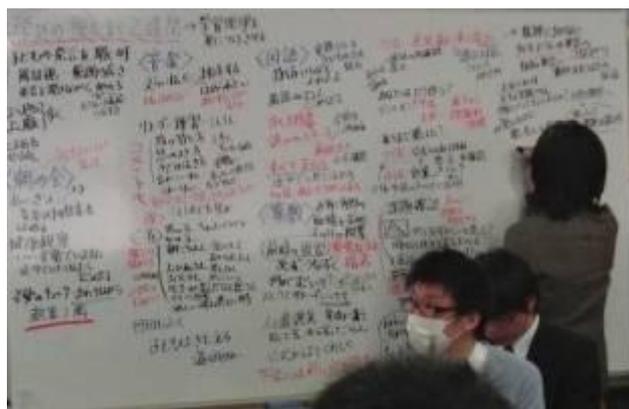
朝の会から、音楽、国語算数とやった。給食、清掃も見てほしい。学級経営で、質問をいただいたものは書いておいたので読んでほしい。なるべくわかるように書いたつもり。

Q7 学級づくり、授業づくりの秘訣を職員にどう伝えているか

本校職員の志賀先生に言ってもらおう。

志賀：まず、今日のように、和田塾として、同じように同じ立場で算数の勉強をやっている。学ぶことが多くて、今日のようにメモする暇がなくても、体で実感していく。子どもの立場で分かる授業を教えていただいている。

その裏で、授業力アップのため、今日は私が黒板に書いたが、子ども達だけでなく、自分でも振り返りが出来るように、



研究授業でも書く立場の人がいる。中堅の教師が書いている。

和田校長は、毎日授業を見に来てくれる。時には、1時間授業を見てくれることがある。子どもにも声をかけてくれることもある。

その1時間の授業記録で学ぶことが多い。1時間目の授業を見てもらうと、3時間目には良い所とさらに良くしていくための内容が書いてある。具体的で、児童の名前付だ。職員勉強になる。

授業づくりイコール学級経営であり、人間関係づくり。みんなが集中し、みんながわかる学級づくりをしている。和田校長からは、一人ひとりに「今はこういう時期ですよ」、「今は絆を深める時期ですよ」と、全員にメールが送られてくる。

私たちに学ぶことが多くて、若手の職員に入って指導されている。

さらに、昨年度研究授業をしたが、その後に、若手だけ集めて力を付けさせるために、どうだったかの話を聞く会を開いてくれる。

校長の授業記録をそのなかにここはこうすると良いと書かれており宝物にしている。(和田先生が校長なので) 幸せである。

和田 50%引きで聞いてください。(笑)

時間があるので質問を受けます。

(記録中のA) かまっていたいてありがとうございます。(笑)

Q 授業中の「線を引かなくても直角をみつけたよ」に対して、それを聞いただけで把握して「後でやるからね」と言われた。

私は子どもの幅の広い考えを拾いすぎてしまう経験がある。用意していなかった考えにどうしたら対応できるか。

A だから指導案をつくる。こっちで10分、こっちで20分、そういうふうに、こうするぞとあらかじめ考えておかないとぶれる。本当にやりたいことが出来ずに終わる。

ここでは、三角形を分けて考えるは最低できなくては困る。

そして最後は、「長方形の面積の半分」にもっていかなくてはならない。最後は折り紙を使って、半분을落とす。ここにいくためにだんだん進めると、「線を引かなくても見つけたよ」という発言はおいておかざるを得ない。

Q 全体を見て話を聞くと、その子の言うことを聞きそびれ、「今、何て言った？」と聞き返すことがある。どうしたらよいか？復唱させるコツは？

A まずは周辺視を狭くして、できたらだんだん広げていけばよい。

復唱させると、ある子の言ったことをそのまま復唱するようになるから、そのままいわせない。それは暗記だ。

尋ねるならば、「Aくんの言った言葉の、良いと思ったことを言いなさい」

そうすると、発言の何がすばらしいかわかる。言ったとおりに言わせない。内容を聞く。

Q 関連して、「直角があります」とあの席の子が言ったことは、長方形に直角があると

理解した。上手く使えば、直角がないという三角形を補強できるように思うが。

A 私はこう考えたということ。その方法もある。しかし、そこに時間をかけたくないということだ。その発言した子には寄り添っていても、他の子の学びが遅れてはいけない。その見きわめが大切だ。

Q 今日は、出来ない子が前にいて、出来る子がうしろにいたが、中学校では出来ないが。

A もちろん、前の子にやってもらったけど、場所が変わることはある。

席替えはする。いつでも出てこられるということはない。しかし、第2弾がここへ来る。そのときはこの子達を鍛えようと思えばよい。

Q 子どもが話し合いをして1時間の授業をつくっているがどう思うか。

A やり方はいろいろある。

基本は自力解決だ。どこまで考えられるかは最後は自力。

そこから後はみんなでやればよい。

たいてい、グループでは優秀な意見の子だけが残っている。そこでは、出来ない子の意見が削除させる。発表させると、分からない子、自信のない子が聞き役になっている。

基本は、自分で考えて、自分で○をもらえる子を育てたい。

Q 教材研究の仕方は、何を、どれぐらい、時期は？

A 私は、毎日続けることがある。それは、板書計画。毎時間必ず立てる。それもノートに手書きで。今日も考えてきた。

「直角が見える」という意見は、例えば、書くとしたらここ。これで対応できる。様々な意見が出てもかまわない。算数も、国語もそうしている。

得意な教科から、まずは毎時間板書計画を書いてやっていくと、予想する答えが出てこなくても、なぜ出なかったか反省の材料になる。毎日の分を週案簿でやって、5時間分考えてやってきた。大事なことは、子どもありき。

子どもが昨日これを習った、子どもが何て言うかな？Cさんが「難しい」といったが、みんながそうなら昨日のことが使えない。

ノーヒントでくばったときにどう思うか？じゃ、こうしよう、これが見えたらいいな。だから、こどもの実態を知るために、最後に振り返りを書く作業をさせる。実態がわからないと次時がスタートできない。子どもの振り返りは、私の教材研究のためにある。

玉置 和田先生とは同じ大学で、一緒に勉強した。このセミナーに引っ張り出したひとり。

今日は、小牧中での最後のセミナーだ。

4月の2週間に和田学級で何をするのかを公開して欲しいとお願いした。だからいつも今日みたいにやっているわけではない。

和田先生は、秋にはほとんどしゃべらなくなる。子どもが育っているので「ふ～ん、なるほど。それで？」ぐらい。誤解されると行けないので、最後はこれを伝えたかった。

和田 最初の2週間は種をまく時期。まかないと9月に育って花が咲かない。9月に育つ

ていないのは教師の言い訳。だから4月はしゃべりまくっている。

今日はかなりエネルギーを使ってくた。 (笑)

4, 5月は、進度が多少遅れても、種をまくのに時間をかける。9月から加速度がつくので、1, 2月には追い抜いて、2月には終わっている。